

よりよい動きを求めて「高め合う子」の育成を目指した体育の学習

～3年生における走・跳の運動 走り幅跳びの実践～

多治見市立精華小学校 教諭 安江美沙子

概要

児童が運動の楽しさや喜びを味わうことは、体育の大きな目標である。体育の学習において楽しさや喜びを味わうためには、**技能の向上**と**仲間の関わり**が重要であると考えた。そこで本実践では、仲間と関わり合いながら活動し、技能の向上が実感できる体育科の学習を目指し、次の3点について実践を行った。1つ目は、課題に対する自分の考えや願いを具体的にもたせるための**導入・課題化の工夫**である。2つ目は、児童同士の教え合いを促進するための関わり合いを生み出す活動の場の設定や**関わり方の指導**である。3つ目は、高まりを実感できるようにするための**自己評価活動の工夫**である。

導入・課題化の工夫で単位時間の課題を明確にしたことにより、児童は目指す動きが具体的にイメージでき、技能や記録の向上につながった。また、活動形態を工夫したことにより、児童同士の声かけや教え合いが生まれ、関わり合いながら楽しく活動することができた。さらに、学び方を振り返る自己評価活動を継続して行うことで、自己の高まりを感じられる児童が育ってきている。

I 主題設定の理由

1 体育科の目標から

体育科の究極的な目標は「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」であると、学習指導要領（平成29年）に明記されている。生涯にわたって自らスポーツに関わることができるかどうかには、**運動ができること・わかること・好きなこと**の3つが大きく関わると考えている。体育の学習において、様々な運動経験を通してこれら3つの要素を高めることを目指したい。

さらに、「運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」ことも体育科の目標の一つとして示されている。このことから、仲間と関わるなかで考えたことを伝え合い、技能を高められる体育授業を行うことが求められると考えた。技能が高まれば、運動が好きな気持ちも高まり、さらに意欲的に仲間と関わりながら運動しようとするよいサイクルが生まれるだろう。

2 本校の研究から

本校では、研究主題を「高め合う子」とし、児童が「自分の考えをもち、自分から求めて仲間と関わり、課題解決を目指す姿」を追求し研究を行っている。このような姿を育成するために、3つの研究の柱を立てて取り組んでいる。

- ①考えをもつための指導
- ②よりよく関わり合うための指導
- ③高まりを実感するための指導

体育科では、この研究主題を受け、技能向上を目指して自ら進んで仲間と関わろうとする姿を求めて実践を重ねてきた。（本校の研究構想図は資料編 p.1、各教科の願う姿は資料編 p.2）

3 児童の実態から

対象の学級の実態は以下の通りである。

年度当初に行ったアンケートによると、81%の児童が「体育の学習が好き」と答えた。休み時間にも体を動かして遊ぶ児童が多く、体育で取り扱った運動を休み時間に練習するなど、体育の学習への関心が高い児童が多い。しかし、体力や運動技能については高くない。新体力テストの結果では、男子の上体起こし、ソフトボール投げの2

種目を除いて、男女それぞれの平均は全国平均を下回っている。そこで、体育の学習を通して運動技能や記録を高め、その喜びを味わうことで、さらに運動への意欲・関心を高めて進んで運動に取り組める児童を増やしたいと考えた。

また、仲間同士の関わりについて、他者に進んで関わろうとする姿があまり見られず、自分のことができれば満足してしまう児童が多い。リーダーを中心に仲間へ声をかけることができる児童もいるが、それに対する反応がなかったり、仲がいい友達とだけ関わろうとしたりする児童いることが課題である。実践を通して、自ら進んで仲間と関わろうとする姿を広めていきたいと考えた。

II 願う児童の姿

運動のポイントを理解し、互いに動きや技を見合ったり考えを伝え合ったりして、技能を高めようとする姿。

III 研究仮説

中核の技能を明確にし、その技能ポイントを教え合う声かけができるようにするための方法を工夫すれば、個人の技能が高まり、仲間と学び合いながらよりよい動きを求めて運動に取り組むようになるだろう。

IV 研究内容

- 1 考えをもつための指導
- 2 関わり方の指導
 - (1) キーワードの設定
 - (2) 活動形態の工夫
- 3 自己評価力を高めるための指導

1 考えをもつための指導

本時目指す動きを具体的にイメージし、どうしたら目指す動きに近づけるのかについての考えを児童がもてるように、次のような導入・課題化の工夫をし、課題の明確化を図った。(指導略案は資料編 p.3)

- ①第1時に動画によって運動全体を把握させた。
- ②運動が4つの局面で構成され、それぞれに

技能ポイントがあることを知らせた。

- ③1時間に1つの局面を取り上げ、順に学習していく単元の流れを示した。
- ④毎時間の導入で、イラストと師範により運動の課題(目指す動き)が視覚的に捉えられるようにした。

2 関わり方の指導

(1) キーワードの設定

活動の中で児童が進んで仲間と関わるようになるために、毎時間技能ポイントに応じたキーワードを設定した。キーワードは、技能ポイントや目指す動きを意識しやすくするため言葉であると同時に、仲間の運動を観察する際の視点にもなると考えた。このキーワードを軸として教え合いが促進されるよう工夫した。

(2) 活動形態の工夫

児童の関わり合いが生まれるように、次のような取組をした。

- ①少人数グループによる活動を基本として授業を進めた。
- ②グループの中で役割を決め、自分たちで練習を行えるようにした。
- ③場や教具を工夫した。

3 自己評価力を高めるための指導

本校では、「自己評価力」を「学習課題の達成状況をもとに、自己の変容と学びの過程を振り返り、以後の学習の目標を明らかにする力」であると捉え、この力を養う取組を進めてきた。

学習後に自分の高まり(変容)を実感できるようにするために、終末の自己評価活動を工夫した。学習カードを作成し、次のように学習を振り返る活動を取り入れた。

- ①学習カードにイラストを用い、意識した部分や変容があった部分を明確にさせて振り返りを行わせた。
- ②自分にとってよかった、嬉しかった仲間の関わり方を振り返り、記述させた。
- ③単元を通した自己の高まりを実感するために、学習前と後の記録会の結果から、伸びを明らかにさせた。

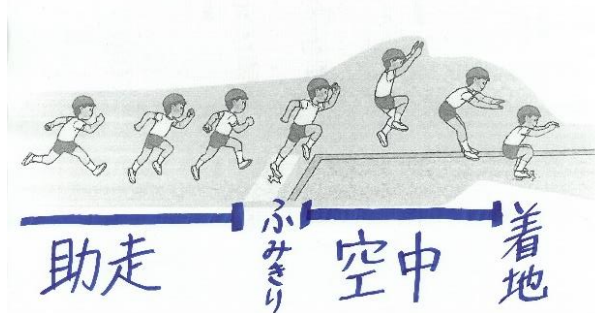
V 研究実践

1 研究内容1について

単元前のアンケートによると、体力テストにおける「立ち幅跳び」以外で跳の運動を経験している児童はいなかった。走り幅跳びがどのような運動かを初めて知る児童が過半数であるという実態からも、まずは運動全体を把握し目標とする動きのイメージをもつことが必要だと考えた。そこで、単元の第1時に走り幅跳びの動画を見せた。

さらに、資料1のイラストを用い、走り幅跳びの運動の構成(助走・踏切・空中・着地)を理解させた。運動の流れに沿って、4つの局面を順に学習していくことを伝えることで、見通しをもって学習できると考えた。

資料1 運動の流れを示したイラスト



また、毎時間の導入では、目指す動きの具体的なイメージをもたせるため、師範とイラストにより、どのタイミングで何を意識するとよいのか、技能ポイントを確認した。

第2時では、リズムのよい助走から、踏切に向けてスピードアップするポイントに気付かせるために、師範の際に助走に合わせて手を叩かせ、最後の3歩で特にリズムが速まっていたことが分かるようにした。

第5時では、両足を揃えて膝を柔らかく使った着地について、目指す動きを明確につかめるように、3パターンの師範を見せた。それぞれ横から見て「ん」「く」「I」の文字に見えるという児童の気付きから、「ん」の字で着地することを目指すのがよいという考えにつながった。

このように、毎時間の課題に合わせて師範の見せ方を工夫したり、練習方法を考えさせたりする

ことで課題を明確に捉え、目指す動きについての考えをもてるようになって考えた。

2 研究内容2について

体育の学習では、運動を「する」だけでなく、「みる、支える」といった運動との関わり方を経験することが、生涯にわたってスポーツに携わるための資質を育成するうえで重要である。そのため、体育の学習において仲間と関わり合いながら、互いの運動を「みる」ことや、教え合ったり役割分担をしながら活動したりして仲間を「支える」経験ができるよう仕組んできた。

(1) キーワードの設定

関わり合いを生み出すための手立てとして、各時間の技能ポイントにつなげた「キーワード」の設定を行った。各時間の技能ポイントとキーワードは表1の通りである。

表1 技能ポイントとキーワード

第2時	○リズムよく助走し、最後の3歩でリズムアップする。 ★タン・タン・タン
第3時	○力強く踏み切り、踏切足と逆足を高く上げて高く跳ぶ。 ★タン・タン・ターーン (ターーンで高く跳ぶことによる滞空時間の伸びを感じる)
第4時	○空中で腕を大きく使い、前方に振り下ろす。 ★バンザイ
第5時	○両足を揃え、膝を曲げて着地する。 ★「ん」 (横から見て「ん」の形に見えるような着地姿勢)

(○：ポイント ★：キーワード)

キーワードは、活動中の関わり合いの中心となる言葉であるため、児童が言いやすく、ポイントをイメージしやすいものである必要があると考えた。そこで、師範を見せた際に、児童から出た言

葉を使ってキーワードを設定した。

さらに、教え合いを促進するためには、キーワードを用いて、いつ、どこで仲間に声をかけるのがよいか分かる必要がある。そこで児童とのやり取りの中で、声かけの練習を組み込めるように導入場面を工夫した。以下は、第4時の導入における教師と児童のやり取りである。

(師範を見せる場面で)

T: 今日は空中のところポイントだったね。
どこで見ればいい?

C: 砂場に入ってた方がいい!

T: そうだね。
じゃあ、踏み切った後、空中で腕がどんなふうになっているか見ててね。いくよ!

C: いいよ!

(師範)

C: バンザイしてた!

T: たしかに。バンザイみたいに腕を大きく使うと勢いがつくんだね。じゃあ、今日のキーワード何がいいかな?

C: バンザイ!

T: じゃあ、今日のキーワードはバンザイ。もう1回やるから、いつキーワードの声をかけるか練習するよ。いくよ!

C: いいよ!

(教師の動きに合わせて)バンザイ!

T: そうだね。踏み切った後すぐに声をかければいいね。

このようなやり取りを毎時間行い、ポイントに応じた運動を観る位置、声かけのタイミングについての考えをもてるようにすることで、進んで仲間に関わる姿を増やそうと考えた。

これまでの体育の学習においても、声かけを中心とした関わり合いを促すために「声のレベル表」(資料2)を作成し、状況に応じた声かけの方法を提示してきた。

(2) 活動形態の工夫

児童同士の関わり合いの中で、教え合いや励まし合い、助け合いが生まれるように、活動は生活班である4人または5人のグループで行った。

資料2 声のレベル表

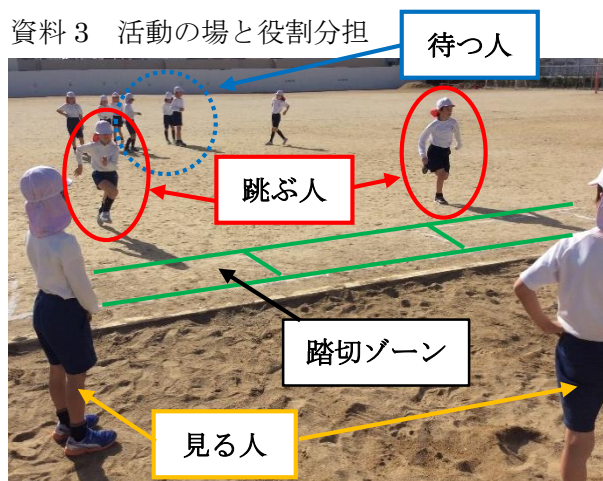
レベル 3	教え合いの声 うん動を上手にするために、気づいたことをアドバイスする声
レベル 2	はげましの声 自分やなか間を元気づけて、楽しく活動するための声
レベル 1	やる気の声 れん習やゲームをもち上げるための元気な声

活動の場所をグループごとに定め、以下のように毎時間同じ流れで授業を進めることで、徐々に自分たちで活動を進めていけるようにした。(下線部はグループ活動)

- ランニング・体操
- ウォーミングアップ
(本單元ではスキップ、ケン・ケン・パ)
- 全体会 (課題提示)
- グループ会 ※本單元では第6時のみ
- 前半練習
- 中間研究会
- 後半練習
- 記録会
- グループ会
- 全体会 (まとめ)

また、資料3のようにグループで跳ぶ人、見る人、待つ人を順番に交代しながら、互いに声をかけ合い練習した。課題に応じて、見る人の立ち位置を変えるよう指導した。第3時には、高く跳ぶためにゴム紐を跳び越える練習を行い、ゴム紐を持つ役割も順に交代して活動した。

資料3 活動の場と役割分担



走り幅跳びのような個人種目の題材においては、毎時間記録会を行うことで、練習の成果を感じたり次への課題をつかんだりすることにつながると考えた。しかし、毎時間メジャーを用いて正確に記録を計測するのは、時間や器具の都合上難しい。また、児童が計測すると目盛りの読み間違え等の可能性もあると考えられた。そこで、児童が自分たちで簡単に、分かりやすく記録が把握できるような教具を考案し使用した（資料4）。

資料4 簡易メジャーを用いて記録会をする様子



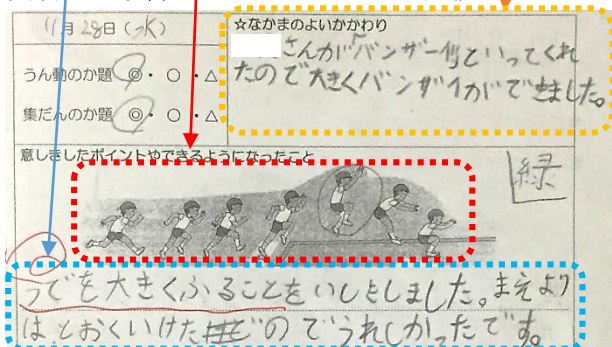
50 cmごとに紐の色が変えてある。

踏み切った所に足形を合わせる。

3 研究内容3について

本単元で使用した学習カードは資料5の通りである。本時意識して練習した部分に丸を付け、どんなことに気を付け、どのように自分の動きが変化したか記述させた。また、よいと思った仲間の関わりについても記述させた。

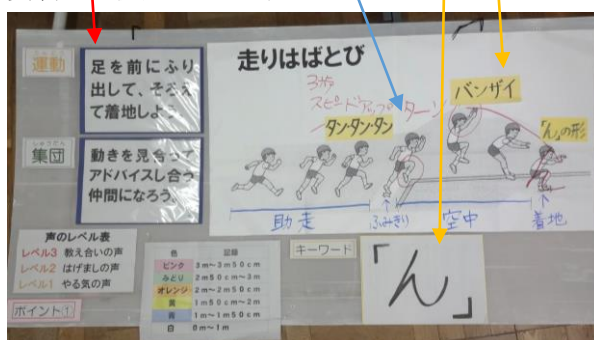
資料5 学習カードを用いた自己評価



このように学習を振り返る習慣を身に付けることで、何を学んだか、どのように学んだかが分かるようになると考えた。学びの過程を振り返ることは、高まりの実感や次への意欲喚起につながると考え、実践した。

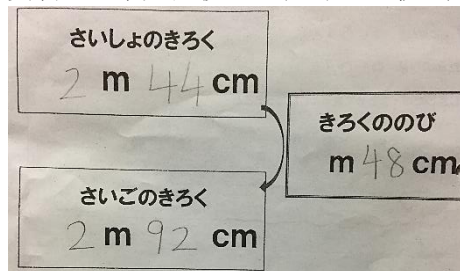
課題や提示したポイント、キーワードをパネルにまとめ掲示することを行った。終末の自己評価活動を支援する手立てとしてだけでなく、学習中に本時の課題を常に意識しながら学習するための手立てにもなると考えた。資料6は第5時終了時点でのパネルである。

資料6 使用したパネル



さらに、高まりを実感できるようにするために単元前後の記録を比較させ、資料7のように学習カードに記した。走り幅跳びのように、記録が数値で表せる種目においては、運動の喜びを感じられる手立てとしてこのような工夫が有効であると考えたからである。

資料7 単元前後での記録の比較（学習カード）



VI 検証と考察

1 考えをもつための指導について

単位時間ごとに一つの局面を取り上げ、課題化したことで、各時間で意識するポイントが明らかになった。その時間に目指す動きが児童に理解され、学習後に動きの変化が感じられた。このこと

は、その時間に課題化した局面の技能ポイントに関する記述が、ほとんどの児童の学習カードにされていたことから分かる。単位時間の課題が明確になることで、児童がその時間何を学ぶか、自分がどんな動きを目指すのかについて考えをもち、焦点を絞って練習に取り組めたからであると考えられる。

また、単元の導入で運動全体を把握し、局面ごとに順に学習していく単元の流れを示していたことで、**児童が学習の見通しをもつことができた。**

「次は空中の動きを勉強するんだよね。」「早く着地もうまくできるようになりたい。」という言葉
を児童から聞くことができた。少しずつできることが増えていくことも児童の喜びにつながっているのだと感じた。

しかし、単位時間の課題や目指す動きに焦点を絞って練習しようとする意識から、前時までに学習した局面のポイントへの意識が薄れてしまうようであった。**前時学習した部分とのつながりも意識させ、運動全体を高めるような手立てを講じる必要があった。**

2 関わり方の指導について

単元後、アンケートにより、声かけについての児童の意識を調査した。その結果を表3、表4に示した。

表3 自分から仲間への声かけについて

	教え合い	はげまし
いつもできた	35%	35%
たまにできた	44%	50%
あまりできなかった	21%	12%
できなかった	0%	3%

表4 仲間から自分への声かけについて

	教え合い	はげまし
いつもあった	18%	23%
たまにあった	38%	59%
あまりなかった	32%	15%
なかった	12%	3%

はげましの声に関しては、自分から仲間、仲間から自分の両方について **8割以上の児童が、声**

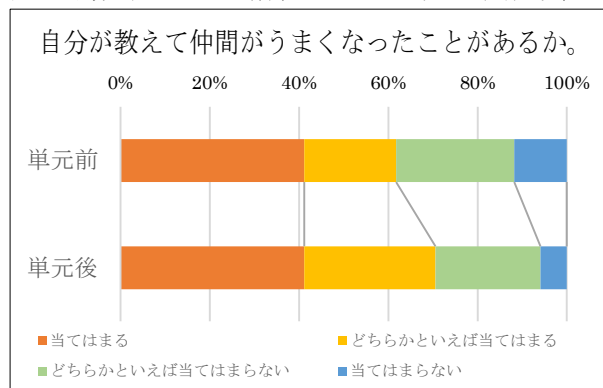
かけがあったことを認知していた。よって本実践では、仲間と互いに応援し合ったり、認め合ったりしながら学習活動ができていたと言える。

自分から仲間**に教え合いの声をかける**ことができたかを問うと、**「いつもできた」「たまにできた」と回答した児童が79%**であった。このことから、学習中の仲間への声かけが活発に行われていたと言える。キーワードを設定したことにより、仲間に声をかけるときにどんな言葉を使うとよいのかが理解されたためであると考えられた。また、活動形態の工夫により、仲間に声をかける機会が保証されていたことも、この結果に影響を与えたと考える。

一方で、仲間から教え合いの声をかけてもらったかという設問に対しては、「いつもあった」「たまにあった」と回答した児童の割合が**56%**であった。仲間に声かけができたと回答した児童の割合よりかなり低い割合であり、**自分が仲間に対して声をかけていることよりも、仲間から声をかけてもらったことの方が認知しづらいと考えられた。**つまり、仲間からの声かけをしっかりと認知できるような場や方法を工夫すれば、より技能や意欲の高まりが期待できると考えた。

また、自分が教えたことで仲間がうまくなった経験があるかという設問では、単元前に比べてその経験があると回答した児童が増加した（図1）。**自分が声をかけることで仲間の技能の向上にも関心が高まり、「高め合う」態度の育成につながると考えられた。**

図1 自分の声かけによる仲間の上達を感じた児童の割合の変化



単元後の児童の感想にも、「友達がどうなっていたか教えてくれたから特にどこを意識すればよ

いかが分かった」「Aさんがタンタンターンと言ってくれたから（助走の）リズムがとりやすかった」「Bさんが今は『ん』の字になってたよなどとたくさんアドバイスをくれたので嬉しかった」といった、関わり合いや教え合いに関するものが多数あった。このことから、キーワードを中心とした声かけによる仲間同士の関わり合いは、児童の技能向上や意欲の高まりに有効であったと考える。活動の様子を資料8に示した。

資料8 教え合いながら練習する様子



また、「グループの子と教え合いながらできたので嬉しかった」「グループで活動すると、グループの子とたくさん触れ合えるから楽しい」といった感想もあった。グループの仲間と活動することへの喜びを感じていることが分かる。単元が進んでいくにつれ、練習中仲間に対して「ちゃんと見て」と頼む姿がよく見られるようになった。これは、仲間に動きを見てもらい助言をもらうことを期待している表れである。これらのことから、少人数のグループで学習する活動形態は、高まりを求めて関わり合う態度の育成に効果的であると考える。

さらに、簡易メジャーを目安にして、記録を伸ばそうと熱心に練習に取り組む姿が多くみられた。自分自身の記録に挑むと同時に、仲間にも「今日は何色だった？」と問いかける姿があり、仲間と競い合うことで記録向上への意欲も高まっていた。このことから、記録が簡単に分かりやすく示されていることは、練習への意欲の高まりや仲間との関わり合いのきっかけになると考えられた。

3 自己評価力を高めるための指導について

児童の学習カードの記述を見ると、ほとんどの

児童が課題に沿った振り返りができていた。教師が提示した運動のポイントや児童と設定したキーワードを使って記述している児童が多い。つまり、単位時間の課題を明確にし（研究内容1）、イラストを用いた学習カードによる振り返り活動を行うことで、何を意識するか（したか）や何がポイントなのかは理解されやすいことが分かる。

指導を継続していくことで、資料9のような自己評価ができる児童も見られるようになった。児童Cは、意識したことや練習したことと自分の動きの変化とを関連付けて考えることができている。この振り返りを習慣にすることで、自己評価力を高めることができ、運動について考え課題を解決する力が身に付いていくと期待できる。

資料9 児童Cの学習カードの記述

意ししたポイントやできるようになったこと

はじめは〇〇だった → こんな動きになった

□□を意識した

しかし、自分の動きの変化を捉え、それを記述できる児童はまだ少ない。自分の動きがどのように変わったのかを考える習慣はまだ十分に定着していないと言える。3年生でも動きの変化に気付けるようにするためには、「はじめは〇〇だったけど、□□を意識したら、▲▲ができた」といった話形を示すことが有効であると考えられる。そのような書き方指導から、運動を考えたり観たりする視点をもたせる工夫も必要であることが分かった。

また、仲間との関わりについて振り返り、記述することで、関わり合いが自分の技能や意欲の高まりにつながったことを実感できる児童が増えてきた。「Dさんが『上手だね』と言ってくれたので嬉しかった」「Eさんが『もうちょっと足をそろえて』と声をかけてくれたから着地がうまくな

った」など、学習カードに多くの記述があった。

体育の学習にとどまらず、毎日学級で行っている「よいことみつけ」の活動でも、仲間の良い姿や感謝したいことを具体的に語れる児童が増えてきたことも、この実践による成果である。

さらに、よりよい動きを求めて自ら仲間との関わりをもととする児童を増やしていくためには、学び方（関わり方）を振り返るだけでなく、その内容を価値付け、広げていく手立てが必要である。仲間との関わりにより、技能が向上したり新たな発見ができたたりした場面を児童の振り返り等からつかみ、価値付けていく教師の意識や工夫が、今後必要である。

VII 成果と課題

1 成果

「高め合う子」の育成を目指し、研究に取り組んできた。これまでに得られた成果は以下の2つである。

1つ目は、多くの児童の技能が高まり、また走り幅跳びの学習で喜びや楽しさを味わえたことである。まず、技能面について、全6時間の単元後に、35名中29名の記録が向上した。平均値等の変化は表5の通りであった。

表5 単元前後の記録の平均の変化（単位：cm）

		単元前	単元後
学級	記録	219.3(±37.1)	250.0(±33.5)
	伸び	30.2	
男子	記録	230.0(±36.2)	260.4(±31.8)
	伸び	29.9	
女子	記録	208.5(±34.8)	239.0(±31.7)
	伸び	30.5	

単元後のアンケートによると、助走・踏切はそれぞれ32名の児童がうまくなったと感じていた。空中・着地はそれぞれ28名がうまくなったと感じていた。着地について、うまくならなかったと感じている児童が最も多かった。最後に学習したため、技能定着の時間が不十分だった可能性があった。資料10は4局面の技能を十分に習得し、記録を伸ばした児童Fの運動の様子である。

資料10 児童Fの運動の様子（第5時）



（資料は運動の様子を連続撮影し、コマ送りにした画像をつなげたもの）

さらに、単元後の児童の意識を探るため、走り幅跳びの学習で楽しかったことや嬉しかったことはあったか、自由記述形式でアンケートをとった。結果は表6の通りであった。

表6 走り幅跳びの学習で楽しかったこと（複数回答あり）

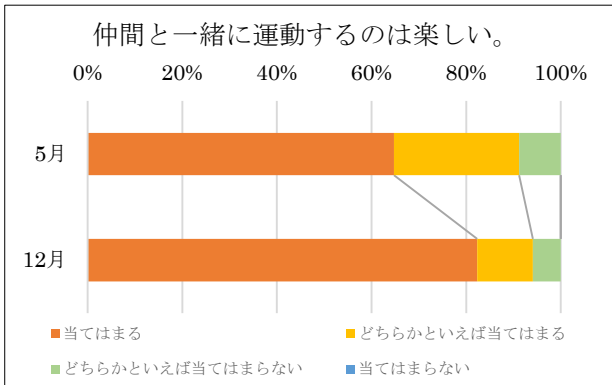
回答	人数
記録が伸びたこと	15
仲間に声をかけてもらったこと	12
技能が身に付いたこと （各局面のポイントができたこと）	7
走り幅跳びの運動自体が好きになった	5
仲間と教え合いながらできたこと	4
コツがわかったこと	2
記述無し	2

アンケート結果では、記録が伸びたことを挙げた児童が最も多かった。次いで、仲間に声をかけてもらったことを挙げた児童が多かった。この声かけには、はげましの声も教え合いの声も含まれている。この結果から、本単元で児童は技能や記録の向上だけでなく、仲間と関わりながら学習することにも喜びを感じられたことが分かる。研究内容2として取り組んだ関わり方の指導が一定の成果を得られたと言える。

2つ目は、体育の学習に対する考え方に変化が見られたことである。体育の学習では、関わり合って学ぶことをきっかけに、運動したり、技能を高めたりすることに意欲をもてる児童を育てたいと考えている。本実践のみでなく、年度当初から「高め合う」姿を目指して指導を行ってきた。走り幅跳びの単元前後では、体育の学習への児童の考え方に大きな変化は見られなかったが、5月と12月とを比較してみると変化が見られた。まず、体育で仲間と運動することに楽しさを感じる児童

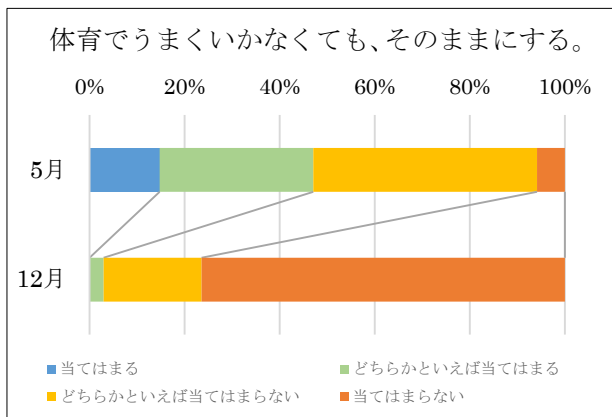
が増えたことである（図2）。

図2 仲間と運動するのが楽しいと感じる児童の割合の変化



次に、体育でうまくいかないことがあったときにそのままにすると回答した児童が減少したことである（図3）。

図3 体育でうまくいかないことをそのままにする児童の割合の変化



これらの結果は、体育の学習における関わり方を継続して指導してきたことにより、児童が仲間と運動したいと感じ、うまくなるために行動しようとするようになってきたことを示している。

最後に、本実践の研究内容についての成果を3点にまとめる。

- 単位時間の課題を明確にし、意識する部分を絞ることで、目指す動きの具体的なイメージをもつことができ、動きの変化や記録の向上に効果があった。
- グループによる学習活動の場を設け、キーワードを用いた教え合いの方法を指導することで、教え合いが生まれ、よりよい動きを求めて関わり合う姿が見られた。
- 学びの過程を振り返り、自己評価する活動を継続して行うことで、学習による高まりを実感でき、さらには運動について考える力が育っていくと考えられる。

2 課題

本実践を通して以下の3つの課題が見つかった。

1つ目は、学習後に記録の高まりや走り幅跳びの楽しさを実感できなかった児童がいたことである。全6時を終えて、35名中6名の児童は記録が向上しなかった。第6時の記録会の場面で失敗してしまった可能性はあるが、学習を終えて「できるようになった」「記録が伸びた」という喜びを味わえなかった児童がいたことは課題である。体育の学習では、技能や記録の向上を求めることを大切にしていきたい。

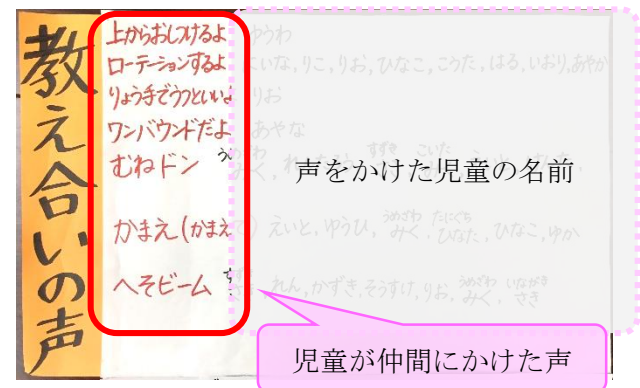
また、アンケートにより走り幅跳びの学習で楽しかったことを尋ねたところ、2名の児童は記述がなかった。楽しさや喜びがなければ、よりよい動きを求めて自ら学ぼうとする児童の姿は期待できない。今後、児童が体育の学習の中のどのような場面で楽しさや喜びを感じるのか、その意識を調査し、授業の中でそのような場面が生まれるよう仕組んでいきたい。

2つ目は、本実践において、仲間との関わりを認め、価値付ける手立てが具体的に講じられていなかったことである。

よりよい動きを求めて自ら仲間との関わりをもつ行動を増やしていくためには、学び方（関わり方）を振り返るだけでなく、その内容を価値付け、広げていく手立てが必要であった。

資料11はネット型ゲーム「プレルボール」の実践で用いた掲示物である。児童の学習カードから、練習やゲーム中に誰がどのような声かけをしていたかまとめ、それを価値付けた。すると、児童の声かけがより活発になったのを感じた。

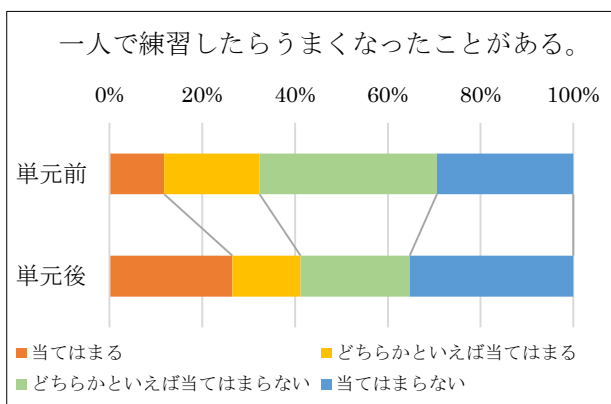
資料11 「プレルボール」での声かけの掲示



学び合う姿を求めるのであれば、児童が関わり合い、声をかけ合う姿を認め、価値付けていく教師の意識や工夫は今後も必要である。

3 つ目は、個人練習の場面と仲間と関わり合って活動する場面のバランスについてである。関わり合いを充実させることを目指してこれまで実践を行ってきたが、一方で技能の向上のためには一人で集中して練習する時間や場も重要であると言える。アンケートの結果から、一人で練習してうまくいった経験のある児童の割合が単元後に増加したことが分かる (図 4)。

図 4 個人練習による上達を感じたことのある児童の割合の変化



技能の習得や運動の修正のためには、仲間からのアドバイスによって自分の動きを認識することも重要であるが、自分自身で課題を意識し、反復練習によって動きを身に付けたり修正したりしていくことも不可欠であるということが確認された。つまり、個人で集中して練習に取り組む場面と仲間と教え合いながら活動する場面のバランスをとりながら授業を進めていくことが必要である。

さらに今後は、技能の高まりに、より有効な関わり方の検討が必要である。児童の実態に応じて教え合いの場を設定し、何を見て何を伝えることが効果的なのかを考えていきたい。また、領域に応じた関わり方についても検討し、様々な学習を通して「高め合う子」の姿を増やしていきたい。

以上から、本実践の課題を 3 点にまとめる。

- ▲技能の高まりや運動の楽しさを感じることができていない児童に対する、個別の指導・支援を検討する必要がある。
- ▲児童の関わり合いについて、よい場面をつかんでそれを価値付ける手立てや、技能向上につながる関わり方を検討する必要がある。
- ▲個人練習の場面と仲間との関わり合いによる学習の場面のバランスについて、児童の実態や題材に応じて検討する必要がある。

3 今後に向けて

本実践やこれまでの実践を通して、体育の学習で関わり合う場面を意図的に仕組むことは、技能の向上と集団としての高まりにつながるという実感を得ることができた。また、継続して取り組むことで、体育に対する意識に変化が見られることがあった。本実践で得られた成果と課題を受けて、体育の楽しさを感じられる児童が 1 人でも増えるように、さらなる実践を積み重ねていきたい。

また、体育の学習場面だけでなく、他の教科でも「高め合う」姿が広がるように、実践の成果を生かし、日々の授業改善に努めていきたい。

VIII 参考文献

- ・文部科学省 (平成 29 年) 小学校学習指導要領解説 体育編
- ・精華小学校 (平成 29 年) 研究紀要「高め合う子」
- ・スポーツ庁 (平成 30 年) 平成 29 年度体力・運動調査結果の概要及び報告書について

